JIRON KOHRON

父・トランプの軌道修正役 才色兼備の愛娘・イヴァンカの素顔

国際ジャーナリスト・戸田光太郎

「犬っころみたいにクビだ」

最初の妻がチェコスロバキア人のイヴァナ・ゼルチコバで、オーストリアのスキー選手と離婚後、ドナルド・トランプと結婚。ドナルド・ジュニア、イヴァンカ、エリックの二男一女をもうけたが、ドナルドはモデルのマーラ・メイプルズと不倫の末イヴァナと離婚。次にマーラと再婚し、ティファニーが生まれたが、再び離婚、今度はスロベニア出身のモデル、メラニア・クナウスと結婚して男児バロンが誕生した。

5人の子供達の中で突出しているのが、最初の妻が生んだ長女、イヴァンカだ。そして恐らく10年後に化けるのが末っ子のバロンだろう。

3人の妻の中で最初のイヴァナはモデルもをけ持ちし、仕事をバリバリこなすタイプ。離婚前にトランプは「家に帰ってもイヴァナは仕事の話ばかりで、もうウンザリなんだ」とこぼしていたが、その頃にはモデルのマーラとの不倫が進行していた。

そのマーラはイヴァナと正反対。ビジネスに勤しむタイプではなく、娘のティファニー共々最近までトランプの住むニューヨークとは反対の西海岸側に長く放置されて来た。

現在の妻のメラニアもまたイヴァナとは違い、どちらかと言えばマーラに近い。トランプに逆らわず、大人しく、びくびくと夫の顔色を伺っているタイプだ。その息子のバロンは、大統領選の勝利宣言をした時は真夜中だったため、眠そうな顔でテレビに登場。「天使みたい」と世界中から評判だった。だが、その後の顔つきを見ていると抜け目ない悪い子供の相で、恐らく最初の妻の生んだ2人の息子、ドナルド・ジュニアやエリックよりも、「手のつけられない悪ガキ」だったという父・トランプに最も似ている。

10代ののバロンを論じるには時期尚早だが、父トランプと母イヴァナの血脈が明らかなのは、この美しく聡明な長女イヴァンカである。

彼女がメディアに頻繁に出るようになったのは、10年くらい前の25歳になった頃だ。トランプが司会をしていたテレビのリアリティー・ショー『アプレンティス』が大ヒットしていた頃、その中の決め台詞「お前はクビだ！」にまつわる話題が多かった時に、イヴァンカは夜のトークショーなどに招かれるようになった。

「いつもテレビやラジオから父の声が聞こえて来る日々の中で、ある日、ラジオから聞こえてくる父の声が耳に入ったわ」と、彼女は夜のトークショーで披露した。

「ラリー・キングが父に聞きました。『あなたは自分の子供達が失敗したら、お前はクビだ、と言い渡しますか？』。父はこう答えました。『お前はクビだ、どころではありません、お前は犬っころみたいにクビだ、と宣言します』――。これはショックでした」

司会者は笑い会場は沸いた。別の司会者の番組でも同じ話を披露していたから「お前はクビだ！」絡みの質問に対する定番の小話回答なのだろう。司会者からは、イヴァンカの喋り方やジェスチュアーが次第に父親に似て来た、と揶揄されていた。

「モデルは汚く性悪な生き物」

それでは、実母イヴァナに関してイヴァンカの思いはどうなのか。

『ピープル』誌のインタビューで彼女はこう答えている。

「母は私のインスピレーションの源泉であり、私のロール・モデルです」

母イヴァナは共産主義国だったチ

エコスロバキアで生まれた。イヴァナは祖国での暮らしを忘れることなく、よく子供達を連れて祖国を訪れていた。「子供達には規律をしっかり学ばせ、厳しい愛をもって接したわ」と語っている。

イヴァンカは1997年にテレビに初めて登場した。父がオーナーの1人でもある『ミス・ティーンUSA』の司会を務めたのである。

それ以前には、リンカーンセンターで『くるみ割り人形』を演じたり、『レ・ミゼラブル』のコゼット役でオーディションを受けたりしていたが、こちらは敢えなく採用されなかったと言う。

1996年に15歳でモデル業は始めている。ベルサーチや、ティエリー・ミュグレー、トミー・ヒルフィガーの広告に起用され、いろんな雑誌の表紙も飾った。

結婚前の独身時代に書いた本『トランプ・カード（切り札）』の中で、彼女はこの短かったモデル時代をこう回顧している。

「モデルというのは地球上で最も意地悪で汚くて性悪な生き物で、生意気で放置され、無教養なくせに尊大で、他の女の子の失望の上に築かれた成功に驕っているティーンエージャー達のことよ」

それもあってか、高校卒業と共にイヴァンカは大きく舵を切り、勉強に力を入れ、2000年にジョージタウン大学に入学した。2年間在学した後で父と同じ、ペンシルバニア大学ウォートン・スクールに転入し、優等で卒業、2004年に経済学の学士号を修得した。

大学卒業後にいくつかの不動産企業で勤務した後、トランプ・オーガニゼーションに2005年入社、不動産開発・買収部門の副社長を務める。最近携わったのは、ワシントンDC.の歴史的建造物の古い郵便局を超高級ホテルに造り替えた200億円の事業だ。トランプ・タワーの25階、隣り合わせにオフィスを持つ3人は、上のドナルド・ジュニアと下のエリック兄弟、そしてイヴァンカで、皆トランプ・ホテル関連の事業を立ち上げている。

ドナルド・ジュニアは主に商業用リースを手掛け、エリックはゴルフ場と建設、イヴァンカは買収と内装、という風に、3人の役割は緩やかに棲み分けられている。

2007年にイヴァンカは自身の高級宝飾品ブランド「イヴァンカ・トランプ・ファイン・ジュエリー」を旗揚げ、数年後に「イヴァンカ・トランプ・コレクション」として、服、靴、ハンドバッグなど、働く女性向けに独自のブランド展開をした。

しかし、自分のファミリー・ネームが「トランプ」であるということ

イヴァンカさんは暴走する父・トランプ大統領のそばに寄り添い“軌道修正”を図る（トランプ氏HP）

が、「トランプ・カード（切り札）」になっていることを彼女は充分に理解している。前掲の著書『トランプ・カード』はそんな中で出版され、イヴァンカは、こう書いている。

「不確実な状況を好機と捉え、どんな状況でも繁栄して行きましょう」

「仕事場で認められましょう。集中して効率的に働けば門戸は開かれていきます」

「強力で一貫したアイディンティティーを確立しましょう。あなたの名前と評判は何よりの資産です」

「自分の欲しいものを明確にしましょう。そうすれば、どんな交渉でも勝利します」

２００９年に結婚し、２年後に長女アラベラを生んでから、数日後にイヴァンカはニューヨークからマイアミに飛んだ。ゴルフ・リゾート「ドラル・リゾート&スパ」を買収したためである。やはり、タフなビジネス・ウーマンなのである。

去年11月に安倍首相が次期大統領のトランプに会いにトランプ・タワーに赴いた時、米国ではイヴァンカと夫のジェレッド・クシュナーも同席したことが問題視された。両者は新閣僚を選定する政権移行チームに入ってはいたが、政府の要職についていない。そんな二人が外交の場に同席したことに「もの言い」がついたのである。

しかも特にイヴァンカは、日本のアパレル・メーカー「サンエー・インターナショナル」との事業交渉を進めていることをニューヨーク・タイムズ紙がすっぱ抜いた。

実はサンエー・インターナショナルの親会社ＴＳＩホールディングスの筆頭株主は、政府系金融機関である日本政策投資銀行であるため、安倍・トランプ会談が、家族のビジネスとの間で利益相反を生むのではないかと疑義を挟まれたのだ。

日米会談への同席が「利益相反」の疑いも

夫・クシュナーによる仇討

イヴァンカ・トランプとジャレッド・クシュナーは、友人の仕掛けたお見合いランチで２００７年に知り合った。２００８年に一時的に離れたものの、やがてイヴァンカがユダヤ人であるジャレッドに合わせて現代正統派ユダヤ教に改宗してから、２００９年に結婚した。

結婚式は父の所有するニュージャージーのゴルフ・クラブで挙げた。そう、ジェレッドの父、チャールズ・クシュナーも不動産王である。

息子のジャレッド・クシュナーはハーバード卒業後、ニューヨーク大学でも法学と経営修士学を取得しているが、実は両大学に父チャールズ・クシュナーは息子の入学と前後して、億円単位の寄付をしている。

父チャールズ・クシュナーは２００４年、脱税、証人買収、選挙資金の違法献金など18件の訴因で２年間の実刑判決を受けた。そして実際に１年間は服役していた。彼は検察官に協力的だった義弟、実の妹の夫の評判を落とすために、売春婦を雇ってモーテルの一室で義弟と関係を持たせ、その様子を撮影したビデオを実の妹に送り付けている。

このような激しい性格の父を慕う息子、イヴァンカの夫ジャレッド・クシュナーは、アラバマ州の刑務所に収監された父を毎週末、面会していたという。

一方、父チャールズ・クシュナーの方は、息子のために刑務所で財布を作って贈り、今もジャレッド・クシュナーは後生大事に使っている。

イヴァンカは、この親子愛を「とても美しい」と評するが、それは自己中心の父ドナルドと次々に変わっていく相手の女性達を尻目に、寄宿舎で育った自分たち兄弟の境遇と比べてのことだろう。

チャールズ・クリシュナーを訴追した連邦地区検事は、その後ニュー

ジャージーの州知事となったクリス・クリスティである。彼はトランプの顧問として活動していたが、最終的には土壇場で政権移行チームから外された。これはジャレッド・クシュナーによる父を牢屋に入れた元検事への復讐劇だと言われている。

横行する密告と落とし穴

まず、イヴァナの3人の子供、ドナルド・ジュニア、イヴァンカ、エリックもそれぞれ妻や夫がいる身だから、それぞれの家庭がそれぞれの思惑で動き始めるだろう。ジュニアとエリックの顔つきは、正直「利発そうだ」とは言いにくい。イヴァンカだけがシャープな美人で、切れる夫ジャレットと共に2人の男兄弟を追い抜いて行く立場になるだろう。

マーラの娘ティファニーは一番弱い立場だが、現在の妻であるミレニアの息子バロンは、最も父ドナルド・トランプに似ていると言われている。

バロンは非常に運動神経がよく、あらゆるスポーツをこなし、父と一緒にゴルフをすることが好きだという。子供部屋は住居の一角にあるのではない。バロンはトランプ・タワーの1つのフロアを占める自分の部屋、というよりは自分のフロアを持っており、寝室以外は好きな飛行機のおもちゃの山で覆われている。

引退した執事のトニーは3歳の頃、バロンにこう言われたことを回想している。「トニー、話がある。まあ、そこに座れ」と、父トランプの複製がそこにいた。

この4年間でトランプ家の人々のパワー・バランスは劇的に変化して行くだろう。当然その先には、シェークスピア劇のような禍々しいお家騒動が頻発するだろう。しかもホワイトハウス内部でも騒動が起きている。ジャレッド・クシュナーと、不気味な白人至上主義者スティーブ・バノン首席戦略官・上級顧問、そしてプリーバス首席顧問が、国家安全保障のフリン大統領補佐官を辞任に追い込んだ。この“三羽烏”とさらにイヴァンカは、トランプ大統領の演説トーンを修正しており、初の議会演説はかなり順当なものになった。

イヴァンカはクリントン夫妻の娘チェルシーと親しく、民主党の政策にも共鳴し、ヒラリーに献金したこともある。今では父ドナルドに産休の必要性やマイノリティへの理解を吹き込んでいる。

家族愛をアピールするが周辺では「お家騒動」の予兆も……

以前、「プロンプターを使う大統領はバカだ」と豪語したトランプも、今回の議会演説には原稿を準備し、クシュナー、バノン、プリーバスとイヴァンカの監修を受け、プロンプターの助けも借りて無事に終えることが出来た。

そのプリーバス首席補佐官をクビにして欲しい、と「ニューズマックス・メディア」会長のクリストファー・ルディーが、親しい友人であるトランプに進言したと言う。「あいつは連邦政府の仕事が分かってないし、コミュニケーション能力に欠ける」――。

そして最近、ジャレッド・クシュナーの影が薄くなって来たとも囁かれている。国家安全保障会議の中南米担当上級部長・クレイグ・ディアを「トランプ政権に批判的な発言をした」との理由で解雇した。

これはワシントン市内の政策研究機関で開かれた有識者による非公開の会議の席上で、バノンらの政権運営を厳しく批判しホワイトハウスが機能不全に陥っていることを指摘した結果で、密告と落とし穴が横行している。